

氏 名	中山健二郎
学 位 の 種 類	博士（スポーツウエルネス学）
報 告 番 号	甲第 594 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	高校野球にまつわる「物語」の再生産に関する研究 —メディアの影響に着目して—
審 査 委 員	(主査) 松尾哲矢（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科 教授） 杉浦克己（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科 教授） 安松幹展（立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科 教授） 菊 幸一（筑波大学人間総合科学学術院 教授）

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

本学位論文は、第 1 章にて研究の背景、第 2 章にて先行研究の検討および本研究の目的、第 3 章にて研究の枠組みについて論じ、第 4 章から第 8 章にて量的及び質的研究により研究の目的に関連する事象の解明を行い、第 9 章にて全ての研究結果を踏まえた総合的考察を行うという構成である。

研究の枠組みならびに研究 1~5 の関係は以下の通りである。

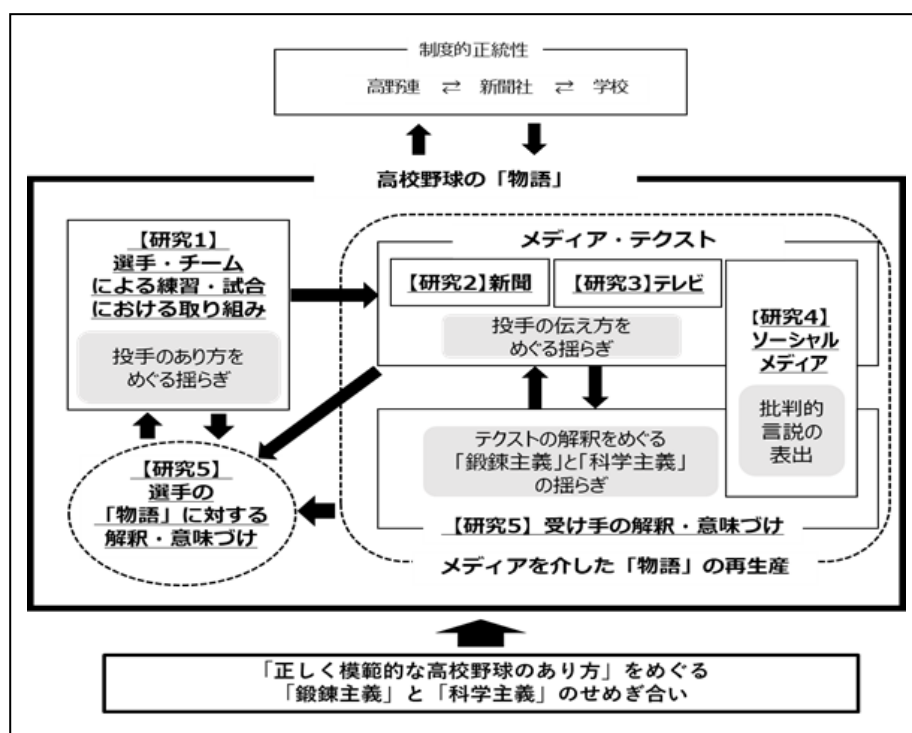


図 研究の枠組み

- ・【第 4 章：研究 1】高校野球の選手や野球部による試合や練習での取り組みにみられる揺らぎ
- ・【第 5 章：研究 2】高校野球の新聞報道にみられる揺らぎ
- ・【第 6 章：研究 3】高校野球のテレビ放送にみられる揺らぎ
- ・【第 7 章：研究 4】高校野球に関するソーシャルメディア言説とその作用
- ・【第 8 章：研究 5】高校野球の「物語」に対する受け手の解釈および選手や監督の振る舞い

(2) 論文の内容要旨

第 1 章では、本研究の背景について論じている。まず、高校野球発展の歴史的経緯について、特にメディアとの関係に着目しながら検討し、「鍛錬主義」の精神などを基盤として高校野球の「正しいあり方」という規範や価値観が形成されてきた経緯を概観している。また、今日において、高校野球の「正しいあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いが生じている様相を読み解いている。加えて、メディア・スポーツの構造と「物語」の概念について検討し、メディア・スポーツ論の観点から高校野球の「物語」を把握するという本研究の視座を提示した。

第 2 章では、本研究に関連する先行研究について検討している。ここでは儀礼論的スポーツ研究の視点、メディア・スポーツ研究の系譜、およびその系譜に位置づく高校野球の「物語」研究について整理し、残された課題と本研究の目的を検討している。高校野球の「物語」に関して、「物語」の動態的側面をいかに把握するのかという点や、ソーシャルメディアを含む現代的なメディア環境を勘案したメディア横断的な分析が必要とされる点などが課題とされ、その課題を踏まえ、本研究は「物語」再生産のダイナミズムをメディア横断的な観点から読み解くことが目的となることを示した。

第 3 章では、先行研究の課題を踏まえ、インターネットを含む各メディアの特性を勘案して、「物語」の動態的な側面を読み解くための研究枠組みを提示している。具体的には、象徴闘争および再生産の概念について検討し、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を背景に「物語」が再生産されるダイナミズムを分析するという理論的枠組みを示し、各メディアが「物語」の再生産に関わる様相を読み解くための研究構成について説明した。

第 4 章では【研究 1】として、高校野球における投手のあり方と取り組みの揺らぎについて検討している。選手や野球部による取り組みの揺らぎは、メディア報道を介して「物語」再生産のプロセスに重要な影響を与えるものと考えられることから、夏の甲子園における投手戦術に着目し、その変化を計量的に分析している。また、戦術の変化に影響を与えうる、「正しい投手指導のあり方」に関する観念的な揺らぎについても検討を行っている。その結果、高校野球に関する科学的知見の蓄積と制度改正の動向に連動し、特に 1990 年以降の夏の甲子園において、投手の完投が減少、継投が増加するという戦術の変化が生じていることが示唆された。

第 5 章では【研究 2】として、高校野球の投手に関する新聞報道について分析している。ここでは【研究 1】で示した投手戦術の変化を踏まえ、投手の投球数制限に関する記事、および完投・連投に関する記事を対象にテキスト分析を行

い、それぞれの記事にみられる「立場・主張」「報道対象」「視点・意味付与」などの傾向性を検討した。これまで「鍛錬主義」的な取り組みを美談化する傾向が指摘されていた新聞報道が、今日において変化する取り組みをどのように伝えているのかを読み解くことで、「物語」の再生産に対する新聞報道の関わりについて考察した。制度に関する報道では選手の健康管理に関する制度改正の議論が客観的に報じられる一方で、選手の報道においては完投という「鍛錬主義」的な取り組みに「仲間」「成長」などの意味が付与されているという、新聞報道による「かき分け」が、「物語」の再生産に関与していることが示唆された。

第6章では【研究3】として、高校野球の投手に関するテレビ放送について分析している。【研究1】で示した投手戦術の変化を踏まえ、ここでは夏の甲子園において完投した投手、および継投した投手たちを主題としたドキュメンタリー番組を対象にテキスト分析を行っている。投手の完投と継投に関する戦術の変化がみられる今日、それぞれの取り組みからテレビ放送がどのような意味作用とメッセージを生成しているのかを読み解き、「物語」の再生産に対するテレビ放送の関わりについて考察した。完投と継投を題材としたテレビ放送は、それぞれ「困難の乗り越え」「友情」という異なる意味を生成しているものの、これらの意味はどちらも「若者らしさ」「青春」の枠組みに還元できるものであった。このことから、変化する選手の取り組みをテレビが象徴的に「物語」の枠組みに回収する一側面が示唆された。

第7章では【研究4】として、高校野球の投手に関するソーシャルメディア言説の分析を行っている。ここではソーシャルメディアに特徴的な「炎上」現象について、その内実を把握するための理論的枠組みを検討したうえで、投手の連投に関するTwitterの「炎上」事例を分析した。「炎上」という特徴的な現象が「物語」の再生産にどう影響しているのかという点から、「物語」の再生産に対するソーシャルメディアの関わりを考察した。「炎上」という現象は、「物語」の伝統的な秩序・意味体系を爆発的に相対化させるという点で、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を可視化し「物語」に揺らぎをもたらす可能性があるものの、一時的・瞬発的現象であるという点で、継続的な議論の場とはなり得ないため、「炎上」単体による「物語」を変動させる影響は限定的なものに留まることが示唆された。

第8章では【研究5】として、高校野球に対する受け手の解釈に関するアンケート調査の分析を行った。受け手の高校野球に対する解釈にどのような揺らぎがみられるのかに関して、「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」などに着目し、メディアによる伝達と受け手の解釈との相互作用による「物語」再生産の様相について検討した。「高校野球観」について、「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎがみられるものの、この揺らぎは「青春」「若者らしさ」とい

う「物語」の枠組みにおいて、どのようなあり方が「青春」であり「若者らしさ」であるのかという内的な揺らぎとして定位しており、「青春」「若者らしさ」という解釈枠組自体は、内的な揺らぎを含みこみながら再生産されているものとみられた。

第9章では、【研究1】から【研究5】の結果をまとめ、本研究で示唆された、メディアを介した「物語」再生産のダイナミズムについて論じている。各メディアの伝達と受け手の解釈との相互作用において、高校野球の「物語」は、「何が『若者らしさ』で『青春』なのか」という定義をめぐる内的な意味変容を含みつつ再生産されているものと結論づけている。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本研究は、高校野球に関する「若者らしさ」「青春」という人々の共通観念や解釈枠組み、すなわち高校野球の「物語」が再生産される様相について、メディアの影響に着目して検討することを目的としたものである。高校野球の「物語」に関する従来の研究では、儀礼論的スポーツ研究やメディア・スポーツ研究の観点から、日本における高校野球が「若者らしさ」「青春」という「物語」を生成する「国民的儀礼」として定位していることや、メディアを通じて「物語」に準拠した意味や価値が人々に伝達されてきたことなどが指摘されてきた。一方で、「物語」の変動に関する様相を把握することや、その変動について、ソーシャルメディアを含むメディア横断的な観点から検討した研究はなされていない。

そこで本研究では、新聞、テレビ、ソーシャルメディアそれぞれの特性を勘案し、メディアを介して「物語」が動態的に構造化（再生産）される様相を横断的に分析した点に特徴がある。

分析の結果、高校野球の正しいあり方をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いを背景として生じている、選手やチームによる取り組みの変化（科学化）が、メディアを介して「何が若者らしさで青春なのか」という「物語」の枠組み内における揺らぎへと回収されつつ、「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組み自体が再生産される様相が示唆されている。

「鍛錬主義」的価値を基盤として歴史的に形成されてきた高校野球に対する認識や解釈の枠組み、すなわち高校野球の「物語」について、再生産という視点から検討することで、スポーツ科学的知見の蓄積や取り組みの変化が、メディアを介して「物語」の意味内容に揺らぎ（「精神力」から「仲間の物語」へ、など）をもたらしつつ、「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組みが構造化されていくダイナミズムの一端を把握したことが、本研究における成果だといえる。また、メディア横断的分析によって、新聞による制度的報道と選手報道の「書き分け」、テレビによる「科学主義」的取り組みに対する象徴的な意味変換、ソーシャルメディアがもたらす既存の秩序の相対化とその限界性など、「物語」の再生産プロセスに対し各メディアが与える影響を明らかにした点も、本研究のオリジナリティであるといえる。

（２）論文の評価

本論文は博士論文に相応しく論理的に構成され、先行研究も十分に考証されており、研究目的の設定、分析枠組みの設定の仕方も適切であった。また、研究１～５を通して、量的研究、質的研究を用いて総合的かつ実証的に研究が行われたことも評価された。加えて、本論文を構成している個々の研究が、学会での学生研究奨励賞の受賞をはじめ、国内の研究専門誌を通過して論文として公表されている点は評価すべきであろう。

本論文では、高校野球に纏わる「物語」の再生産の特徴とその様相を明らかにしたとともに、再生産にかかわる各メディアの特徴を浮き彫りにした。得られた知見は、高校野球において、スポーツ科学的知見に基づく合理的な指導法や制度設計を段階的に導入していくプロセスを検討する上で重要な示唆を与えるものであるといえる。また高校野球関係者のみならず、社会一般における高校野球に対する認識に対しても、「変わる／変わらない」という二項対立的議論から生じる評価の分断を乗り越え、「よりよい変わり方とはなにか」という建設的な議論を生成するための視点を提示したものといえる。

さらに、本論文で得られた知見は、スポーツ文化の構築に及ぼすメディアの役割を再考するうえで重要な視点を提示したとともに、今後のスポーツの文化の構築を考えるうえでの応用可能性が認められる。

以上の点を踏まえ、総合的観点から博士論文としての基準を満たしているものと評価された。